

イラクリオン、クレタ歴史博物館所蔵、エル・グレコの《キリストの洗礼》

—制作年代に関する再検討—

越川 倫明（東京藝術大学）

現在クレタ島イラクリオンの歴史博物館に所蔵されるエル・グレコ（1541—1614）の《キリストの洗礼》は、イタリア時代の初期作例として、過去半世紀ほどのあいだに新たに発見された最重要作品のひとつである。この小さな板絵は2003年にサラゴサの個人コレクションで見いだされ、2004年12月8日にロンドンでの競売を経て、エル・グレコの生まれ故郷の町によって取得された。

この作品の非常に興味深い点のひとつは、従来から知られるエル・グレコ最初期の小型三連祭壇画《モデナ三連祭壇画》（モデナ、エステンセ美術館）とよく似た構成の三連祭壇画の断片である可能性が高い点である。《キリストの洗礼》の発見の結果、1991年に発見されていながらほとんど注目されることのなかったキングストン（カナダ）にある小板絵《羊飼いの礼拝》（アグネス・エサーリントン・アート・センター）が、同一の祭壇画に由来する可能性ゆえに、にわかに注目を集めることになった。

これらの新出作品は、2005年のロビン・コーマックとマリア・ヴァッシラーキの論文を皮切りに、これまでかなり多くの研究者によって論じられ、また科学調査も実施されてきた。しかしながら、現在まで見解の一致をみないのは、《キリストの洗礼》（および《羊飼いの礼拝》）の制作年代の問題である。エル・グレコのヴェネツィア滞在期前後の足取りを示すわずかな文書史料は、1566年12月にいまだカンディア（現イラクリオン）にいる記録、1568年10月にすでにヴェネツィアにいる記録、1570年11月にすでにローマに到着している記録である。この足取りに照らして、これまで研究者たちは、《キリストの洗礼》に対して1567年頃（コーマックとヴァッシラーキ2005）、1569年頃（アルバレス・ロペーラ2007）といった推定年代を与えてきた。ところが、アテネのベナキ美術館で実施された光学調査の結果が2007年に公刊され、おそらく「1566」（あるいは「1567」？）と読まれ得るローマ数字の年記の痕跡が発見された。この早い年代は、一般に承認されているヴェネツィア時代の作品の編年と両立しがたいため、《キリストの洗礼》の制作年代は現在も見解が揺れている状態である。

わずか2～3年の相違であっても、イタリア移住後のエル・グレコの急速な様式変化に照らすとき、《キリストの洗礼》の年代推定の差異は、イタリア時代の様式展開の解釈に大きな相違をもたらす。発表者は、従来の諸見解とは異なり、《キリストの洗礼》と《羊飼いの礼拝》をローマ時代最初期（1570–71年）の作品と考えたい。その根拠は、これらの作品に、ローマ在住の写本彩飾画家でエル・グレコの友人であったジュリオ・クローヴィオ（1498—1578）の代表作『ファルネーゼの時禱書』（ニューヨーク、モーガン図書館）の参照に基づくと思われる表現が認められることである。